

日本の学術雑誌による海外情報発信力強化 Enhancement of scientific information transmission to overseas countries by Japanese international scientific journals

林 和弘^{1*}

Kazuhiro Hayashi^{1*}

¹ 文部科学省科学技術政策研究所

¹ NISTEP, MEXT

日本の学術出版と、電子ジャーナルに関連する世界のトピックスを概観し、日本発の学術情報発信の意義を再確認しつつ、その可能性と難しさについて考察する。また、国内外の研究助成団体および、関連組織の動向から、科学者は公的資金による研究開発投資に対する社会説明の必要性が高まっていることを認識する必要があることを。

その上で、Altmetrics とオープンアクセスが、被引用数に代表されるこれまでとは違った研究論文の新しいインパクトの測定を可能とする点に注目したい。新しい評価手法が生まれる可能性が出たことによって、当事者である科学者自身によって、研究成果の発信がどう変わりうるか、また、その評価はどのように行われることが適切かを考え、改めてジャーナルのあり方に役立てることができる。

キーワード: 学術情報流通, 学会, オープンアクセス, altmetrics, 研究のインパクト測定

Keywords: scholarly publishing, learned-societies, open access, altmetrics, measuring impact of researches

日本学術会議におけるジャーナル国際化への考え How does SCJ think about international scientific journals?

北里 洋^{1*}

Hiroshi Kitazato^{1*}

¹ 独立行政法人海洋研究開発機構、海洋・極限環境生物圏領域

¹Institute of Biogeosciences, JAMSTEC

第20期以来、日本学術会議は科学誌の国際化について検討してきた。その経緯と現状、そして国際ジャーナルとはどうあるべきかを紹介し、議論する。

キーワード: 日本学術会議, ジャーナル, 国際化

Keywords: SCJ, journal, globalisation

米国におけるオープンアクセス化に関する政策論議の展開 Open access publication in the United States

遠藤 悟^{1*}
Satoru Endo^{1*}

¹ 東京工業大学大学マネジメントセンター

¹University Management Center, Tokyo Institute of Technology

米国におけるオープンアクセスの動向について、関連する政策を中心に報告する。米国等においては非政府の機関による PLoS や BioMed Central の形でオープンアクセスが進展したが、政府においても 2005 年に国立保健研究所 (NIH) の PubMed Central によりオープンアクセスによる論文のリポジトリが開始された。

オープンアクセスが進展するにつれ、多様なステークホルダーが著作権や財務運営等の問題を提示するようになったことから、米国議会の下院科学技術委員会においては大統領府と協力し、2009 年 6 月に大学、大学図書館、商業出版者、学術団体、著者負担モデルによるオープンアクセス設置者等により構成されるラウンドテーブルが設置され検討が行われた。その結果は、翌 2010 年 1 月に「Report and Recommendations from the Scholarly Publishing Roundtable」としてとりまとめられた。

他方、大統領府においては、2009 年、2011 年にデータ共有と学術出版へのパブリックアクセスに関するパブリックコメントの募集が行われ、一般市民を含む多様なステークホルダーの意見が多く寄せられた。

「Scholarly Publishing Roundtable」の提言内容やパブリックコメントを紹介することによりオープンアクセスに関する政策面の論点を紹介する。また、NIH 以外の政府機関のパブリックアクセスに関する最近の取り組みも報告する。

キーワード: オープンアクセス, 米国, PubMed Central, 大統領府科学技術政策室, Scholarly Publishing Roundtable
Keywords: Open Access, U.S.A, PubMed Central, OSTP, Scholarly Publishing Roundtable

電子ジャーナルとオープンアクセス Electric Journal and its "Open Access"

加藤 憲二^{1*}
KATO Kenji^{1*}

¹ 静岡大学理学研究科, 前附属図書館

¹ Faculty of Science, Shizuoka University

[ジャーナル価格の高騰] わが国の国立大学の3分の2以上ではA社が発行するジャーナルの全タイトルを読むことができる、いわゆるフリーダムタイプの購入をしています。学生数1万人程度の中規模国立大学でこれに支払うコストは年間約5000万円。この価格が毎年4?5%上昇するという商業モデルが採用されており、独占禁止法にもその性質上抵触しないとされています。上昇の理由は論文数の世界規模での増加。しかし電子化ジャーナルの価格は紙媒体を元に計算されています!

[二つのオープンアクセス] 学術研究の成果はそもそもそれを支えたTax payerに公開される必要がある。これが一つのオープンアクセス。これを実施するためにわが国の大学や研究機関では機関リポジトリの構築をこの数年、急いできたところ。もう一つは電子ジャーナルに掲載された論文を購読することなく自由に読むことができるような仕組みとしてのオープンアクセス。これをしっかり進めるのがオープンアクセスジャーナル。論文は、「購読して読む」から「お金を払って読んでもらう」に大きく様変わりします。そしてもう一つ、過渡的で奇妙な、つまり購読するのにお金を払い、<広く>読んでもらうのにもお金を払う論文ごとの著者負担による、オープンアクセスではない電子ジャーナルに掲載された論文単位のオープン化。根底にあり、解決されねばならない問題のひとつは一論文を電子化するのに<本当は>いくらかかるか?

そして私たち研究者がしっかり考えねばならないことは「誰がジャーナルを作っているか」。研究し、論文を書き、査読し、そして人生のある時期には編集に時間をさく。これらすべての労働がほとんど対価なくすすめられ、ジャーナルの品質保証のために莫大な価格を支払っている現実はどう考えてもおかしくはありませんか? その中身を<日本>の現実に即してもう少し詳しく話します。

キーワード: 電子ジャーナル, オープンアクセス, 機関リポジトリ, フリーダム (ビッグディール)

Keywords: electric journal, open access e-journal, institutional repository, freedom(big deal)

欧文誌”Earth, Planets and Space”のオープンアクセス化 Open Access Publication of Journal ”Earth, Planets and Space”

小田 啓邦^{1*}, 小川 康雄²
Hirokuni Oda^{1*}, Yasuo Ogawa²

¹ 産業技術総合研究所, ² 東京工業大学

¹National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, ²Tokyo Institute of Technology

欧文学術誌”Earth, Planets and Space”(EPS 誌)は地球電磁気・地球惑星圏学会, 日本地震学会, 日本火山学会, 日本測地学会, 日本惑星科学会の5学会によって出版され, 世界中の全ての著者に対して開かれたジャーナルである。EPS 誌は”Journal of Geomagnetism and Geoelectricity”および”Journal of Physics of the Earth”の2誌の後継誌として1998年に創刊された。平成25年度の研究成果公開促進費「国際情報発信力強化」に対応して, EPS 誌は2014年1月から全ての論文をオープンアクセスする方針を定め, その準備を進めてきた。図書館購読モデルからオープンアクセスモデルへの転換によって, 学術誌の主要な収入が著者負担額(APC)となるために, 著者がEPS 誌で出版するメリットについて再確認することとなった。今後の方針として, EPS 誌はオープンアクセスになるとともにLetterを重点化し, 2016年1月から日本地球惑星科学連合と共同で出版を行う予定である。発表では, EPS 誌のこれまでのオープンアクセスに対する取り組みとこれからの方向性について紹介させていただく。

キーワード: Earth, Planets and Space, オープンアクセス, 欧文学術誌, 著者負担額, 図書館購読モデル, オープンアクセスモデル

Keywords: Earth, Planets and Space, open access, Academic Journal, Article Processing Charge, library subscription model, open access model

日本地球惑星科学連合によるオープン・アクセス電子ジャーナルの創刊 Publication of open access e-journal by JpGU

川幡 穂高^{1*}
Hodaka Kawahata^{1*}

¹ 東京大学大気海洋研究所

¹ Atmosphere and Ocean Research Institute, The University of Tokyo

JpGUは、分野を代表する「公益社団法人」で、地球惑星科学は、地球物理学、地質学、鉱物学、地理学などの学問分野から構成されており、わが国における地球惑星科学関連学協会49が参加しています。これまで20年にわたり例年5月に多数の学会が共同して口頭・ポスター発表ができる機会を作り、連合して地球惑星科学を発展させる確固とした土台を築いてきました。2012年(H24)には口頭・ポスターの全投稿件数は3,876件、全参加者も7,318人と過去最大を記録し、毎年増加傾向にあります。

今回の新規取り組みはJpGUが「電子媒体」ジャーナルを多数の学協会と協力して発刊することであり、現在、連合大会ではアブストラクトのみが公表されています。本事業は、連合大会での優秀な発表論文とともに地球惑星科学に関するレビュー(総論)を中心に文字媒体による国際情報発信を目的としたものです。具体的には1)地球惑星科学における世界の一極を担えるオープン・アクセス(OA)電子ジャーナルの創刊、2)連合大会の多角的・統合的な成果の公表、3)参加学会との共同発行です。この概念は、日本学術振興会の科学研究費補助金の趣旨そのものであると言えますので、すべての参加学協会の合意を得て、「研究成果公開促進費」の申請をしております。本セッションでは、JpGUのめざすジャーナルについて、最新の情報を提供するとともに、参加の皆様の要望を伺うとともに、問題点などを議論したいと考えています。

キーワード: 日本地球惑星科学連合, オープン・アクセス電子ジャーナル, 地球惑星科学, 参加学会, 日本学術振興会
Keywords: JpGU, open access e-journal, earth planetary science, Participating society, JSPS